

## ファン・アントニオ・サマランチIOC会長のあいさつ

国際オリンピック委員会 (IOC) は、その歴史に捧げられた初めての作品『百周年を記念する本』の発行を心から喜んでいきます。

1894年6月23日、パリのソルボンヌにおいて、ピエール・ド・クーベルタン男爵はオリンピック競技大会を復興するための国際委員会を設立しました。第1回オリンピック大会は、オリンピズムの〈祖国〉アテネで、1896年開催されました。

スポーツと文化、体育と芸術を総合する近代オリンピックは、どのように発展してきたのか。それがこの本の主題です。ここには、オリンピック運動の発生から現在までが語られています。

オリンピック競技大会については、オリンピアドを重ねるたびにマスメディアの関心も高まり、これまで何十億という人たちに、しばしば、それも巧みな筆致で伝えられてきました。

しかし、この『百周年を記念する本』によって、氷山の隠れた部分がついに明らかにされました。ここには、平和と兄弟愛と連帯の理想の勝利のために情熱を傾けた人々の一世紀にわたる戦いのすべてが語られています。困難に満ちた一世紀でした。

単に語られているのではなく、永遠の現在として「生き返った」とさえいえます。

オリンピック運動が — オリンピックの旗の五つの輪に象徴されるように — どのようにして世界を征服したか。私たちの理解は、なお一層深まることでしょう。

一人の会長の時代から次の会長の時代へと、ちょうどリレー競技のように、指導者たちの人目に立たない仕事が続けられてきました。

長い年月の間にIOCによってつくられた委員会や研究グループ、管理運営業務など各分野における彼らの献身的な働きが、大学の教授や研究者たちの努力で、ついに日の目を見るに至りました。その客観性は推奨に値するものです。

私たちは、この本を誇りにしてよいと思います。この本は、この日常的な世界の中でオリンピズムが実際にどのように築かれてきたかを、生き生きと証言しています。

私は、IOC名誉委員でありIOC総務主事である同僚のレイモンド・ガフナー氏に、特別の感謝を捧げたいと思います。彼は、このプロジェクト全体の優れたコーディネーターです。そして、当然のことながら、この本はピエール・ド・クーベルタンに始まる391人のIOC委員に捧げられています。この391人が今日のわれわれ、今日のオリンピックをつくったのです。

1994年 ファン・アントニオ・サマランチ  
IOC会長

## 序 言

レイモンド・ガフナー  
IOC名誉委員・総務主事

国際オリンピック委員会 (IOC) のファン・アントニオ・サマランチ会長は、この本の最初のページで、391人の人々が今日のIOCを形づくったことを強調している。

IOCの百年の歴史は、結局のところ、さまざまな出身、背景、職業、気質の、それぞれ長所と欠点、光と影を持った男たち — 最近は女性も含まれる — の歴史である。この歴史は、これまでも数多くの本や研究、論文などの対象となった。その中には優れた作品も多い。しかし、残された文献 — これについては、各著者の本文の最後に参考文献として挙げてある — に加えて、いまだに整理の終わっていないIOCの膨大な文書、とりわけ1921年に設立された理事会 (EB) の未公開の議事録などに基づいた組織的な分析の対象になったことはなかった。

そのため、1990年、IOC会長は、この新しい — しかし、この上もなく重要な — 作業に当たる研究者のグループを指名し、IOCの百年史の編纂という使命を託した。作品を形成する三つの巻のうちの第1巻の発表は、1994年6月23日、パリのソルボンヌにおけるIOC創設百周年を記念する式典に合わせて行われることになった。

作業グループは以下の人々で構成された。

- イブ・ピエール・ブーロンニュ教授 (フランス)
- ファーナンド・ランドリー教授・博士 (カナダ)
- カール・レナーツ博士 (ドイツ)
- オットー・シャンツ教授・博士 (ドイツ)
- マドレーヌ・イエレス準教授 (カナダ)
- ノルベルト・ミュラー教授 (ドイツ) — コーディネーター

作業を始めるにあたって、このグループは主な目標を以下のように定めた。

- 高レベルの歴史的資料に立脚し、時代の流れに沿った世界の変化の枠組みの中にオリンピックの組織を位置づけること。
- 学問的成果を読みやすい形にまとめること。

しかし、どんな場合でも、参考資料による裏づけには限界がある。

第一に、資料は常に不完全だからだ。資料の多くは、綿密な研究にもかかわらず、必ずしも期待に応えてくれない。また、事実を部分的にしか記録してないものもある。

議事録をとったり調べたりしたことのある人ならば、だれでも知っていることだが、時として、記録に書いてある事柄と同じように、書いてない事柄にも重要な意味がある。

どんな組織の場合でも、その歴史には舞台裏や横顔がある。記述されている出来事の政治的、社会的、経済的背景を描くことなしに、歴史は完全なものとはならない。

そういうわけで、心からの感謝を作業グループのメンバーに捧げたい。

私は、4年間、このグループの委員長を務めながら、皆が、粘り強く、情熱的に、科学的に、腕の冴えを見せながら、研究を進めていくのを見てきた。それぞれの背景が違ってもかかわらず、目的に対する共通の意識、何としても成功させようという一つの意欲、そして彼らのチームスピリットは、まことに称賛に値するものであった。

研究調査を容易にし、スピードアップするために、グループのメンバーはその同僚たちにも協力を求めた。彼らは快くそれぞれの専門のテーマに光を当てて貴重な貢献をしてくれた。このことに対して、心から感謝したい。

私は、しばしば縁の下の力持ち的な仕事をしてくれたIOCスタッフのことに言及したい。彼らは自分たちの専門知識を提供し、この膨大で複雑な作業のために献身してくれた。彼らは多くのものを与えてくれたが、同時に多くを学んだことも疑いのないところである。私は、とくに次の人たちの名を挙げたい。アルファベット順に、パトリス・ショレー、ベティー・ギニヤール、ミシェル・イラシヤバル、ミシェル・ベイヤール、カレル・ヴェンデルである。

プリントやグラフィックスの専門家、ローザンヌのレユニ印刷所の協力者やパートナーにも感謝したい。彼らこそ、この作品 — 今、皆さんが手にしているのが、その第1巻だ — を立派に仕上げてくれたのだ。

最後に、どれほど多くを翻訳者に負っているかを強調しなければ、まったく公平を欠くことになるだろう。シャンタル・ジェムリの率いるIOCチームの翻訳者も、外部の翻訳者も、ともに重要な役割を果たした。実際のところ、原稿の多くはドイツ語で書かれていたが、本はIOCの公用語であるフランス語と英語で出版される。

われわれは、IOC翻訳部のルース・グリフィスに多くを負っている。彼女は、フランス語とドイツ語からの英訳と校閲をほぼ一手に引き受けたが、その能力は抜群で、しかも微笑みを絶やすことなくテキパキと対処した。英語版の読者は、彼女の仕事の素晴らしさを分かってくれるにちがいない。

IOCが作業グループと最初に合意したプランでは、4人の著者の記事を収めた2つの巻と、専らIOCの歴史のさまざまな側面に関する興味深い記事を集めた別冊としての第3巻が、同時に出版されるはずだった。

この計画は、1994年の初めに — つまり、かなり差し迫ってから — 変更された。実は、1993年12月、ランドリー教授が突然重病に倒れたのである。ランドリー教授は1972年から1994年までの時代を担当していた。教授は大手術を受け、執筆の時期が長い回復期に重なってしまったので、当初の計画のように、1994年夏に三つの巻を同時に発行することは不可能になってしまった。

IOC百周年の祝賀行事の枠組みの中で、この事業が相応しい座を占めることができるように、

最初の二つの巻だけを1994年の夏に発行し、1972年から1994年について部分は、1994年から1995年にかけての冬に出版される第3巻に収めることにした。

第2巻は1942年から1952年までの時代(レナールツ教授)と、1952年から1972年までの時代(シヤンツ教授)を、また第3巻は1972年から1994年までの時代(ランドリー教授とイエレス教授)をあつかう。

別冊の発行があまり遅れないようにするために、別冊の記事を三つの巻に分割して掲載することにした。そういうわけで、最初の二つの巻で論じられている主題に関する補足記事は、それぞれの巻に付け加えられる。

非常に幸いなことに、ランドリー教授は、最初の段階から、マドレーヌ・イエレス博士・教授の卓越した協力を得ることができた。イエレス教授は自分自身の計画を思い切って変更し、歴史に関する知識と才能がIOCに一層完璧に役立つようにしてくれた。

このことに対して、われわれは心から感謝したい。チームの全員も、ランドリー教授が、同僚の協力を得て、担当する仕事を完成できるよう、必要あれば、喜んでイエレス教授を助けた。

この偶然の事態のおかげで — 不幸中の唯一の幸いだが — ランドリー教授は、1994年6月23日という記念すべき日の当日まで、研究を続けることができた。

さらに、サマランチ会長も、もし望むなら、1994年のパリコングレスにおける議論についての最終意見を載せることができるようになった。

一つのプロジェクトを5人の著者の共同作業によって行うことは、たとえチームのメンバーが頻繁に意見交換をしても、微妙な問題を提起する。

第一に優先しなければならないのは、それぞれの著者の当然の自由を尊重することである。彼らは、自分が担当した記事に責任を負っている。しかし、歴史に対してどのようにアプローチするかについて、研究者の感性の違いを計算に入れておくことも必要である。

もちろん、われわれの仕事はIOCの百年の歴史に捧げられたものであって、それを差し置いて7人の会長の歴史に捧げられたものではない。

しかし、それぞれの会長の個性が物事の扱いに決定的な役割を演じているとき、どこに一体これを分ける線が引けるだろうか。

最も顕著な例は最初の時代、ピエール・ド・クーベルタンの時代である。

この時代、しばしば孤独な、誤解され、時代の流れに逆らった一人の男が、やがて近代オリンピックとなるものを考え出し、創造し、生かし、守り、発展させたのだった。

彼は、いかなる障害もものともせず、四半世紀以上にもわたって、彼に課せられた仕事を担い続けた。最初のころは、ある程度の混乱も避けられなかった。すべてを新しく考え出さなければならなかった。組織が未熟で、財政的な裏づけを持たず、行政当局の支持も全然ないIOCは、クーベルタンの卓越性と欠点の入り交じった予言者的な決意と、全き献身によって生き残ったのであ

る。

この初期の段階を描くには、研究者が研究対象と一体化することが不可欠だった。

ブーロンニュ教授は、このことを深く理解していた。

教授はクーベルタンの歩んだ道を辿り、テーマに内側から光を当て、時にはクーベルタン自身になり、自己をクーベルタンと同一視するよう試みた。このアプローチは、著者にとってもテーマとしても、恐らく最も相応しかったのだろう。

ブーロンニュ教授のテーマは、IOCの波瀾に満ちた青年期を生き生きと蘇らせることだったからだ。クーベルタンが、まだ人が足を踏み入っていない道の可能性を探る〈斥候兵〉(クーベルタン自身が使った表現)としての冒険を続けていた時期である。

しかし、明白なことが一つある。どの時代にも、その時代特有のスタイルがある。

1925年、クーベルタンが去ったあと、オリンピックは変わり始めた。その時以来、IOCは理事会(EB)という形の〈政府〉を持つようになった。

1921年、クーベルタンの冷やかな同意のうちに発足したEBは、ゴッドフロア・ド・ブローネー議長(クーベルタンはこの職を望まなかった)のもとで、直ちに成功を取めた。

クーベルタンのオリンピック競技は、華々しい成果を挙げた。いまや世の尊敬を集めるようになったIOCは、しっかりした構成を持つ組織として徐々に発展し、継続性を重視し、社会のなかに確実に根を広げていった。そして、虚構の相手ではなく、しかるべき具体的なパートナー(国際競技連盟、各国オリンピック委員会)との間に、安定した関係を築くことが可能となった。

カール・レナーツ博士は、この第1巻で博士が担当する1925年から1942年までの時代(バイエーラツール会長の時代)にIOCの内部で起きた変化を、完全に把握している。博士は、ますます政治の揺さぶりに直面するようになったIOCの紆余曲折に富んだ歴史の隅々まで、研究者としての記憶力と飽くことを知らぬ考証に裏づけられた、正確で、厳密で、わずかの隙もない、確かな洞察力をもって見渡した。

この第1巻に肩を並べている二人の著者が、それぞれの仕事を通じて示された、こだわりのない広い心と互いに尊重し合う気持ちに、私は大きな喜びを感じている。それはこの作業をすすめるわれわれを大いに鼓舞した。なぜなら、これこそが、IOCが近代オリンピズム百年を祝うにあたって頼りとすべき、最も確かな価値だからである。

われわれがIOCから与えられた任務を果たせたかどうかを問うのは、まだ早すぎる。それに、その問いには読者が答えるべきだろう。

しかし、この一連の作品は、われわれの前に一つの基本的な疑問を提起した。そのパートナーとともに最大の重みを持つ社会的存在となったIOCは、そのまま存続できるのだろうか。存続するだけにとどまらず、影響力を増大させることさえも可能だろうか。

この目的のために、その歴史を彩ってきたプラスやマイナスの教訓を全面的に役立てることはできるのだろうか。そして、とどのつまり、この目的を達成することの根本的な意味は何なのだろうか。

私の意見では、その鍵は、人間社会に奉仕する際にIOCが示してきた独立性、独創性、有効性の強さにあると思う。

この救いがたい世界の中で、オリンピックを象徴する五つの輪が、真に確信と希望の光を放ち続けるならば、その影響は計り知れないものがある。

虚しい言葉だろうか。そうかもしれない。そうでないことを証明する責任は、われわれの肩にかかっている。

サマランチ会長が言及した391人のIOC委員の半数以上を、私は個人的に知っている。だから、私にとって、IOCの百年の後半の歴史は、彼らの顔、彼らの声、彼らの振る舞いと切り離すことはできない。1994年3月の『オリンピック・レビュー』に以下の文章を書いたとき、私の心の中にあっただのは彼らである。

「すべての人間には、限界がある。しかし、ごく限られた稀な瞬間かもしれないが、仲間にも助けられて、自分の限界を超えることができる。だから、ある種の状況が創り出されたならば、集団は構成員の総和よりもよい仕事をするすることができる。仲間の中にいれば、自分自身を超えることはたやすい。

私は、このことをIOCの中で何度となく確かめることができた。これは、IOC委員が就任の際に述べる誓いの言葉と、無関係ではないだろう。

そもそもの始めから、IOCは、IOC委員がその義務を果たす際に、自分自身を超えようとする気持ちに目覚めるよう、また、その機会を持つように意図してきた。すべての人間社会は、その弱点と欠点を持つことを理解していたからである。

クーベルタンは、常に、歴史的な新委員選出システムを守り、それから利益を引き出すために闘い続けた。クーベルタンは『IOC委員は、それぞれの国や競技団体の中でIOCを代表するのであり、その逆ではない』という立場を堅持してきた。

クーベルタンはIOCをつくる際に、躊躇なくいろいろな身近な例を参考にした。

その中には、ヘンリーレガッタ委員会も含まれている。これは、クーベルタンにとって好結果をもたらした。

今日、われわれも、伝統維持への配慮と変化への意志との間の実り豊かなバランスを十分にとった上で、われわれの政策をよりオープンな考えを反映するものにすべきかどうかよく考えてみる必要がある。

これを達成するには、IOCの構成を現代社会の基本的な構造に遅滞なく適応させなければならない。そして、これまでの新委員選出制度の利点と、オリンピックムーブメントの中で活動する他の勢力を結び付ける、新しい委員選出制度を考え出さなければならない。」

伝統維持への配慮と変化への意志、この野心的な政策実現へ向けての一つ一つのステップが、この作品のページに記録されている。オリンピックの世界は、そこから靈感を引き出すことができるだろうか。これに対する確かな答えはない。しかし、われわれは、既に百年を経た意志—成し遂げようとする意思—が存在していることを知っている。

この意思は、未来の歴史に刻印を残すことのできるほど強いものであろうか。過去に起こったことについての知識は、IOCの次の世代が答えをつくりだしていくうえで助けとなってくれるにちがいない。

## 略語のリスト

AAA	アマチュア体育協会
AAC	アマチュア体育クラブ
AAU	アマチュア体育連合
EB	理事会
EC	執行委員会
FIFA	国際サッカー連盟
FIG	国際体操連盟
FINA	国際水泳連盟
FIS	国際スキー連盟
FISA	国際漕艇連盟
FSFI	国際女性スポーツ連盟
FSFSF	フランス女性スポーツクラブ連盟
IF	国際競技連盟
ILTF	国際ローンテニス連盟
IOC	国際オリンピック委員会
ISU	国際スケート連盟
NOC	国内オリンピック委員会
NSDAP	国家社会主義ドイツ労働者党
USFSA	フランス競技スポーツ協会
YMCA	キリスト教青年会



ファン・アントニオ・サマランチIOC会長のあいさつ.....	1
序 言.....	2
略語のリスト .....	8